詩前車

第拾八輯

August.

TOMOKO.

詩南……車

● 第三巻・第六號目次

●詩
喪失　寺崎浩
ありつたけのもの　松本純一
馬鹿　館高重
油煙　深川秀邦
●
薄明の歌　前田重夫
病床一日　濟水綾子
●
朝霧　藤井芳人
夜他一篇　石井賢三
●
詩三篇　下田直
月見草　馬場卯一郎
うつろなるあたま　勝本爲夫
病室　安濟和三
夕暮　中澤秀峯
うしろ　片寄耿二

●詩南車詠草
宮田明愛
島末眞之
佐藤義家

●三人抄
鈴木佐代子
さとう・きよこ
小杉露子

●雜詠
四家明
白椿
えとう・さぶろう
中島修二郎

●詩評　KKK

●評論
藝術瞥見及詩南車時評　岡田四郎
なつまけ（漫談）　たつを

●創作
銀座寸景　岡田鬪志雄
或る兵士と女　鈴木勇
點字の遺書　島田丹光
憩ひを藝術にうで玉子　秋山愁子　小沼文彦

月夜　秋田千秋
七號　中木良一

●詩
わが知らぬ歌　岡田みのる
おもひで　坂本直枝
初夏のうれひ　菊地誠一
合歡木の花　さとう・きよこ
短章二粒　坪井憧
初夏の夜　大里彌生
丘人の人　大川傳
なやましき春　水町冷子
七月！　加藤ひろし

磐城文藝協會々則

編輯後記　片寄耿二

K. KAMAYA

水！
泡が立つたら
●外來者が皆な逃げてしまつた

DRESS

袋屋洗張店
平町五丁目

電話　八番
一六八番

平藝妓屋組合

喪失

寺崎浩

1

——いつまでも……？
——いつまでも。

夜
華かな灯盞（ほざら）のほとり
群がる罌粟の花辨にむせて
「メアキュルバ」の匂ひは
春の夕暮をふり撒いて行く。
リラ色の微笑の中に溶けて來るチゴイネルワイゼン

2

青褪やし白衣をまとひ、
空を踏み、月を踏み、蒼の葉擦れを踏みて、
そよ風の様に
墓場に下り行く君の背姿………。
物を言はず
丘の上に一本の龍膽の花は咲けり。

藝術瞥見及詩南車時評

岡田四郎

最近一寸した動期でトルストイの『藝術とか何ぞ』とイワノフの『藝術論とコーガンの『プロレタリア藝術論』を讀んだ

各自ドクマ論を振廻して居るので大變面白く讀めた。ガッチリして居るのわやつぱりトルストイの物かと思つた。續けて三つ一邊に短い期日に讀んだんだか一番僕の心を打つた。次にベコーガンの物で大半は作品詩や過程を論じて居た様で最後の稿で理論を書いて居いてくれたので僕の様にプロレタリア藝術に好意以上の物を持つ者にブルヂォアー藝術支持者に對して一つの擧りとして良い物を持つたと思つた。中にはトロツキーの論文が引用されて居る『プロレタリアートの使命は階級の無い社會を創る準備のための闘爭であるから藝術もプロレタリア文化の建設前ブルヂォアー藝術がプロレタリア藝術の生れない前の様な階級のない文化藝術を造るのである

所謂プロレタリア文化内にをいてわ

藝術＝プロレタリアー文學＝藝術

であると云ふ意味の事が有つた

流石見境が差ふ事を感せしめられて嬉しくなつた。それからイワノフの物は又別の意味で良いのかもわからないがもし藝術史を敎へんとするならば自分はマックス、ベーアーの社會主義通史の方が未だ〳〵くわしく書いてくれたと云氣がした。

其の點餘り感心出來ない。

トルストイのわ亦別な見界かもしれないが良い所が未だ有る事を感せさせたそして一部の分士がトルストイの泣虫と一邊に此れをはね付けると云ふのは實にせまい見方だと思ふ。我々は未だトルストイの良い所は隨分有る事を知らなければならない。

それに食はすぎらい式な暴論はよして出來るだけ良い所を取つてしまつて粕の粕を我々の出にさらけ出してこそコスモポタリンだと云ふ氣がした。

——プロレタリア藝術は勞働階級と廣汎なる勞働大衆との心理と意識とをプロレタリアートの終局の使命に融ふやう組織する所の藝術を稱して云ふのである——

（ウオロンスキーの論文中より〇〇の所は文學と有つたのを必要上藝術と改めた）

——藝術の定義を下さんとせば悅樂の手段から此を離して人間交偵の一條件であると見る事で藝術上の諸作品は藝術を既に製作した者と現にその製作にいそしみつゝ有る者とその同時もしくわ前後に於て同様の藝術的印象を受ける凡ゆる人々とに一種の關係を結ばせる因を作る。——（トルストイの論文中より右二者を上げたがいづれも片よつて居る勢は有れども民衆に目ざめさせそして結ばせる或る力を云ふ事には變なないゝ思ふ。

そして此等の人は藝術を分けて善藝術と惡藝術として居る。所謂眞の意味の藝術は善と有つて一人良がりの模倣物や有す天物は絶對の意味で惡藝術で有る。

ヴイトーヴインが聾になつた時に作曲した曲を聞いた或る分子が此に似た物を造つたと云ふ事が有るが氣狂やみて居るとも藝術では有り得ない思ふ。

此所にもこう云ふのが有る。

主觀的なり。他人にわゝからないでせよう云々。と云ふ詩で有る。

此が惡藝術となしに何ぞ。眞の意味に以て社會に害を流すとも一寸も藝術品ではない善意に解釋して言語の羅列………ときり思いない何となれば主觀的だから…………

もつとくわしく說明すると純なる入門者をまよわす物である。入門者が初めて此の詩に打あたつて此が詩かと疑ふ。そして得る所は他人に不明ない文句の羅列。これが詩だ。と思ふつて其の彼の感情を支配して居ると思つて見たい。すでに批判力なき者をして毒氣に醉しめ事である。これとも此の藝術を力がそうさせると高言するのなら別な問題である。

藝術とはいやに四角張つた定義を固守するに暇のたい物でわないだらうか決して必要を認めまい。それが便利上必要と解釋したいのである。たゞそれ

3

私の白花化た亡骸は
たよりない影の様に
かなしい匂ひの様に
よろ〳〵と虛ろから虛ろへ階段を下り
虛ろから虛ろへの街を流る。
——華かな思ひ出を埋めよう。
——華かな思ひ出を埋めよう。

ありつたけのもの

松本純一

つるはしは握られたまんま
二足獸の肩に丸くそびへて鐵の牛弓
空間は二ツの頭蓋骨に滿たされ
がつくり胴体の崩れた——
それが
炭塵に鋭くくり殘された膝かぶが眞黑い太陽
をめがけ
岩をむしり
のめり

のめつては裂け
無風の洞壁に枯れ切つた肉体をはませ
やがて骨々を節うたせる濡れ布のやうなひゞきが血管の唯一つ持つ銅鑼となり
わあこうしてしつかりと
おれの生産
おれだけの生産
——その無數！

馬鹿舘

高　重

今日も
まつ青な麥畠のまん中に
つき立つてゐる
大空をにらみつけながら
このまゝで
このまゝで
おれは眞理がつかみたいのだ
雨がはれ上つてしまふと

梅雨晴

はその作品によつて何等かの感情（良い意味の）凡ねく人々に通ぢさいしたならば。

で此所に文藝時評の如き物の必要を考へられる所謂眞の藝術の善導の爲に。

プロパカンダの爲にも。若き入門者の道を詩南車第三卷第二號の松本純一君の『落日』や『ひるの月』の如き詩の毒氣。良い意味ひの言語の羅列的な何等の藝術的價値のない物に對して眞しつなる批判を下し彼の目前に醜悪なる正体を見せ付けてやるのが職務であるから。

勿論松本君にのみ此の弊を以つて居る物ではない手近な例として先日の合評會に以て言つて居たのを思い出したからで有る。迷惑でも有らうが許してもらいたい。

それから詩の場合に多く見られる形だがブル陣入にてもプロ陣内見られ所である氣取つた言語の使用である。或は形容詞の如き左に良い例を引いて見よ

牛原の風に
　その息吹きかへる—フアベルー

恍惚とした物倦さ
肉の疲れ
木々は凡て風によりて
戰き乍ら泡擁してゐる
小さい聲の合唱である
おゝ脆く　鮮やかな呟きよ

ちよ〳〵ささへづリアン〳〵さうなる。
柔かい呼ひは
草のささやきに似て居る
流れて行く水の下の
泡の渦よ！

此の魂は眠げなる
呟きの中に叫んでゐる
それは我等に取りてうめきである

あの煙突が二本
靜かに息づいて
時々風を光らせてゐる

風

四月終りのだるい空氣は水の様に沇れて
麥畑のまんなかをつんとなめ
向ふの竹藪をばく〳〵と
屏風のやうにゆすり初めた

油煙

深川秀邦

讀書の頁くる指先に
ふはりと落ちて
頁を汚した油煙
この街は
一片の油煙で
生きてゐる
眞黒い大空

葉を打つ雨の音

私ひとり、お前にさり
柔かき露の落つる間の
低き頌歎の疲れ

『小さき聲の合唱』とは何か『草の囁きに似た聲』とは何かその意味が私にわ全くわからない、とトルストイは云つて居る。諸君こう云われて氏の詩を讀んでわかりますか大抵の人は不明だと思ふ。今までも隨分こんなに有つたんです、しかしみんな詩とはこんな物かと自分一人で納得してしまつて居た場合が多かつたので有つて我々は前掲の詩と云い今の詩と云ひ又先月號の詩南車の詩にも我々は『月のにほひ』云々と云つた様な遠の浮く様な形容詞を正面から見て居られるだらうか。我々の要求する物は眞面目な物でそれが單順でも木突な物でも差支ない

『堀り出された蛙は
充血した赤い眼玉で青絹の空を見つめてゐる』
何か我々の心を打つ物が有るだらう

（完）

漫談　なつまけ

たつを

（1）

さあ　みんな　こつちへ寄り給へ
汲みたての水……一匹三錢位の金魚なら飼つてもさしつかへなささうな……を飲みながら大流行の漫談で冷汗をかいてみやうぢやないか

フォードは自動車ぢやないよなんて考へず浴にカーをすてゝ小丘にテント造りの小セットの椅子テーブル
眩惑的な海水着——但し濡れない——
嬌体を更に瞳の底に輝かせば烈日もものかは『海邊行進曲』
海水浴　オリンピックの豫選でなく何々海峽横斷競泳の練習でもあるまい
遺憾なく性をさへ發揮し得れば　それは　モダーン　であると

梢にともされた明りに
白くそゝぐ雨
遠く街の燈は
陽炎のごとく

青葉を打つ雨の音

春雨・飛行機・十文字

春雨に沈んだ飛行機は
音もなく南椽の破離窓で
西から東に一文字を切る

従に白く流れた澪

薄明の歌

前田重夫

白い星が
泛木(うき)のやうに慄へてゐる
金雀枝(えにしだ)はみんな散つてしまつた

灰色の湖の畔に

未知の世界の
黒い海潮音だらうか
樅の梢に泡だちさやめくのは
綿毛のやうな

一本の燈心草を凝視(みつめ)てゐる
私の想念に、黄色い小鳥が
抛物線をゑがいた。

病床一日

清水綾子

朝から晝
晝から夕べ
私の一日の平凡さ
私の夜のあじきなさ

あゝそれだのに
窓い來る風よ
そんなに

(2)

キャンピング　トップ、パッシング
ロック、クライミング……………
『なんな生存競爭よ』
一流の運動具店で取寄せさせたそれはそれ程立派な登山具を揃へて押し出す
方々……………
決して人間足跡の高地へ行かれ給はざることを合掌して保證する
それは遭難の報道を三面記事に賑はしせないで世人に微苦笑をさせないこと、縱橫無盡の話材を人に御馳走しながらすることが出來るから……………

(3)

小者謠曲らしきものをうなる………と本人斷言する叙へられるに、觀世寶生喜多金春、金剛の五流ともその殿堂に入れば皆一つなりと唯末者のいふ、我は何流なりと
文藝又しからんか
……………ズム…………スト、また末者か
ましては…………に於ては——
遺憾ながら以下抹消するんである

(4)

石城文藝協會とかの設立
誰しも反對するものはないはずだ
その主意にはね
そして群小より所謂「合流へ」
ものさしもひよつとすると大變な間違ひをするし……………
そこで漫談らしくするには——
……………
丁度この時南車も新裝したばかりの時なのに……………
——おい　おい——

漫談といふものはもつと興味ある材料とさつぱりしたユーモアを含むだものだ
——なんていふことを
少くも漫談といふものに注意して居る人は
第七天國の鋭感さをイーサーの動くのを知るやうに知つてゐるはずだから
そこで彼女はいふ
『いわ　よくつてよ』

（終）

銀座寸景(トンコ)

（讀むミナリオ）　岡田闘志雄

影、セメントの殺風景な四角な箱の行列、自動車、電車、人の波、光の海幻怪な影像の闇。

……其の中にチョッピリ生色のない、お坐なりのポプラの青色……
人殺しの機械文明の吐息の吐出されてゐる、帝國主義的資本主義の典型！日本の首都東京のバロメーター銀座の眞中の夜の十時、美しい女（着物と高い化粧用具だけが美しいのかも知れない）モガの波がざわ〳〵と浮んでゆく
——モボの風がそわ〳〵と吹き散つてゆく……………。
人間、自動車の目玉。悲鳴、電車の火花、オートバイの怒號、自轉車のすゝり泣き、光、光、光の交叉！皆な動いてゐる。
けれど、影像の闇の、正しい斜影わ、どつかの偶で整止してゐる……………。
その中で異質な人間が一人（銀座の波とわかけ離れた汚い片足の男乞食が）しきりに哀みを乞ふてゐる。
乞食「哀れな男で御座います、炭坑で作業中にあやまつて、トロにしかれてこんなになつてしまいました。働くことの出來ない哀れな男に、どうぞめぐんで下さい」低い哀れな乞食の聲が銀座の街頭を愽んでゆく……………、氣取つた歩み一際目立つ表現模樣のモガが人々の波に押されてゆく……………

變つた歌を唄ふのか

午後

二時がなつた
地球は重い鉛の光の底に沈んでゐる
畠も、家も、電柱も皆死んでゐる
いきをするものは一つもない
鉛に底に沈んだ地球
額のおくれ毛が、わづかにおのゝいた

朝霧

藤井芳人

朝霧が
部屋のなかまではひつてゐました
ゆうべねるとき
戸を閉めるのを忘れたのです
枕もとに置いた
眼鏡をとりあげて
くもりをふきました

乞食一段高く叫ぶ

乞食『哀れな男で御座います、一文惠んで下さい』

表現模様の女、一寸振返る、青と赤と緑と黒と……様々な感情の曲線、けれど瞬間ー侮蔑と憎惡の黒い感情——で女は又氣取つて歩んでゆく、悲しさうな乞食の顔……乞食の小さな聲、否空氣の感情かも知れません『フンこいつあ失縮た、今夜は百貨店の廣告みたいな男と一緒ぢやあなかつた』

人の波　人の流れ　車々　ゆがんだ影、消ねてゆく商店街の光、一ッ二ッ三ッ四ッ……街路街の列！　寂しい赤電氣電車……。

フラシュアワー・・・・・・・

遠くで仁丹の廣告燈——片足の乞食の歩み、重い足取、搖いでゆく片足の幻怪な影………

小さな宇宙の聲『此れは誰の姿だ』……。

數日後の夜……

同じ銀座の一角——

乞食の哀れな片足の姿……それをさえぎる人の波、光の波　車の波　暗い影像……　乞食の聲『哀れな男で御座います、一文惠んで下さい』澄ましてゆくモボモガの群、學生三人の酔つた足取——高く低く奇妙なリズム……

學生1『どう思ふあの人生の落伍者を』

學生2『フン彼奴わ人生の全部を知らぬ男さ、不幸と謂ふこと以外に、幸福を、否人生をつかむことの出來ない男さ』

學生3『さうだ、食つて飲んで歌つて踊ることを知らぬ人生の不具者さ人生の夢に十分したり切れず、現實の世界をのみ、のぞかうとしてゐる哀れな男れな男の姿なんだね』

人の波　人の波　波々　物質文明の大きな波。

銀座の心臓わ物凄い唸つてゐる……銀座の夜の高潮時だ!!!

ボロ〳〵な桒葉服が三つ銀座の良心を突切つてゆく……　片足の乞食の叫だ『炭坑で作業中あやまつて、トロにしかれた哀れな男で御座います、どうぞ惠んで下さい』桒葉服の鋭い感覺……乞食の傍へ歩んでゆく三人！

勞働者1『おい兄弟、可哀さうに何處の炭坑で怪我したんだい』

ある朝の詩

ポケットの
時計のグラスのこわれたのは
けさになつて小指がいたんでならないのは
どうしたのか

愛するものよ
今宵は一人で
月でもみてゐらしやい
NOSTALGIA
じめ〳〵した朝の喫茶店に
秘かに父の姿と
今はなき母の姿を
その大理石の片隅にきざみつけた

夜他一篇

石井賢三

一日の束縛から
やうやく解放された夜

勞働者2『こんな街頭でいくらそんなことを叫んでも駄目だ——愛人の爲に惡者と戰つて足を惡した、けれど樂しい夢も瞬間愛人の死によつてさめ果て、遣瀬ない寂しさをいだいて私自身の生命を此のバイオリンにたくして放浪の旅を續けてゐる哀れな男で御座います、てな風なことをしやべりや一も二もなし寄つついてくるのが、この腐つた世界の景色なんだ、な、おいだから俺達の世界へこい』

乞食『だが〳〵』

勞働者3『をい、遠慮することあねえ、手と目が滿足な内は働くんだ、マッチのペーパー張りでもなんでもして』

乞食『いやだ！　俺あ此の上ブル共の遊興費を造りたくわねや』

勞働者1『其所だ自給自足の原理わ、俺達の造つたものも、俺達の仲間が賣りにゆくんだ、そして仲好く暮してるんだ、プロはプロ同志で』

勞働者2『働いて〳〵そして時が來たら俺達は一勢に起上るんだ、農村から工場から僕達の仲間わ時の來るのを待つてゐるんだ』

乞食『そうか、俺も働かう、輝かしい俺達の世界を夢みて』

勞働者1、2、3『ゆかう俺達の世界に』

表現模様の女、女の様な男と二人四人の前を行過ぎる………、ブーンと香水の香り、否恐しい亞片の臭だ、プロの凄慘な血と汗の臭だ。血が見える、骨が見ゐる、汗が見える、どん底にあえいでゐるプロレタリヤの着物に、時計に一切の裝身具に

上ッ面な二匹の男女の律動に………。

不圖振返つた女の目　四人の目　火花火花激しい空間の瞬闘——反目……

女の男への私語『可哀さうな乞食さんねえ、妾お金を上げてくるわ、人生の樂しさを忘れたお乞食さんに——』

青年の叫び『おゝ美わしの君のみ心よ！
あなたの心は廣い海の樣だ！否聖母マリヤより以上の女神だ！　身も心もうるわしきわが美しの姫百合よ！』

女が四人に近づく、美しく光る五十錢玉『可哀さうな人ね！』四人無言、氣まづい沈默……光々　人々銀座の心臓は狂つてる………乞食の叫びは女の身

籠より放たれし小鳥の様に
夜と共に踊り狂たいほど嬉はしい

ステツキを振つて
大道を漫歩する時と
同じ様な喜が

土を破つて生れて來る
小鳥が自由に
奔放に
大空を飛ぶ愉快さ
私に夜は言ひ知れない
喜がひたつて居ると思ふ

魚市の朝

ふと觸れた印伴天の
ひやりと感じた朝
コンクリートに竝べられた魚
七月だのにひやり感じる朝
『お早ふ』生きの良い最初の挨拶が
長い魚市を傳いて行く朝
鯛！

体をしびれらせそして化石さしてしまつた。
乞食『不僞善者、男と一緒の時だけわ女神様で跡わなんでえ、何時も一人で歩く時にや豚の穴けえ』
女の顔、男の顔、人々の顔、快よい四人の顔——銀座の心臟わ笑つて笑つて、笑ひ轉げてさか立ちしてゐる、突然電光の樣な叫び
乞食『俺ぁ目が覺めた今迄の俺ぁ過去だ、新しい世界に俺ぁ進む』
暗い闇……闇に躍る銀座の顔………………（完）

戯曲 或る兵士と女

鈴木勇

（二）

室内に軍用テーブル一個椅子三個あり机上に軍事電話と兵士給料表を備い、女三人が片隅に居る、この時東入口より孫軍長の部屋に副官入り來る
副官『（女を見入り乍ら）軍長殿只今、戰時部隊は此二十支里に向つて行軍を開始しました。張、季、淳の三名が行衛不明であります、彼等は死刑が正當かと思ひます以上』
孫『休んだ奴は二日分の給料を差引くと規つて居るんだ用が濟んだら早く出て呉れ俺は急がしいんだ』
官手持無沙汰に去る
孫『無斷で入る奴は之から死刑にせんけりやならん』
一人具やき乍ら花撰、乙月、紫蘭芳へと漸次言い寄る
花撰『いやです』
孫『嫌かお前は』
乙月『妾も嫌です』
孫『嫌ふなこれでも軍察官だ人が居ないから好いもの居たら俺の値打にきず物だ、紫蘭芳お前は俺を好きだらう』

鰹！
竝べ立てられて居る魚は
今にもはね上りそうです

詩三篇

下田直

やさしい樂園

あまり　やさしい樂園よ
靴で　踏み入るには
路　いつぱいに　チョクでかいた
子供の自由書
　雀
明るい屋根で
子雀に　わさをたべさせる
親すゞめ
神よ

紫『いやです』
電線未だ不通戸外の三名見張り疲れて寢入る、しばらくして三名何者かに起こされる
張『誰れだ』
季『季大人を知らねいか』
淳『起こさずとも好いものを…………………』目をこする
この時異樣な兵士數名劍を擬す
季『戰は勝ちかな』
張『孫軍長の一件は……』
淳『丁度好いやみんなの手を借り樣せ』
大勢の兵士をかへり見る
張『それともお可笑い給料でも渡したのかな』
寢とぼける三名有無を言はせず縛し上げられて了ふ。孫軍長も共にばくされて來る
敵將校『女はこの外居ないか』
季『はいそれ丈けある』
敵將校『この女は唯れのものだか知つて居よう』
張『いゝ閣下のものです』
敵將校『閣下とは唯れのことだ』
淳『貴大人閣下のです』
敵將校大きく笑つて女を連れて退場
倒れて居る孫軍長を三人して介抱する、漸く氣付く
孫『見たか』
季『見た』
孫『あの事を見たか』
張『見た』
孫『みんな見たか』
淳『みんな見てた』
敵の歡聲が村々を壓す電燈此時つく　（幕）

すゞめをまもりたまへ

戀

戀は、重い　SEASI CKNESS……

あなたは　まだ
こんな長い航海には初めてでせう

なあに船に慣れたなら
直ぐなほりますよ

月見草

馬場卯一郎

月見草が咲きましたつて
近所の少乙女が持つてきてくれたよ

花とてなんにもない、わたしのくらしに
なんとまあ　ふさわしい花なんだらう
ぽこ　ぽこする　わたしのこゝろに
おつとりする潤はいを滿されるやうな
静かな花だ

小さなおまへよ
よく氣がついてくれたね
やさしいおまへのこゝろ盡しが
たまらなくわたしは　嬉しいよ

化石しそうな生活に生きて
ほんとうにやさしいものがなければ
わたしは　たえられない

うつろなるあたま

勝本爲夫

ものみな水銀のしづけさとなり
見えずなり
わが半身水に消ね　なくなり
たゞ　その上に
くちたる　うつろなる　あたまあり

蜘蛛は巣をいとなみ
水銀の光かへれば
糸をひき　手をさしのべ

散文

點字の遺書

島田丹光

1

外はあるかなしかの春雨が哀愁の忍び泣きです。めしひの欣一の哀戀が春雨の息づきに六疊の室にかすかにおのゝき、空氣がこんなにもうるんだ靜さです。

——みゑちやん……………

やるせない想ひが指端から針先へ……………厚紙に力こめて穴があけられて行きます。

……………俺はお前が好きだつたのだ！

欣一は此處まで來てフッと思ひ出した樣に急に歔欷くのでした。

點字——點字——

あゝめしひなる故にこんなにもやるせないもだねです。知つてもらひたい心を抱きしめ、知つてもらへないやるせなさ、悲しさを寂しさを、もだねます。なげきます。

開かれぬ眼から涙—涙—涙—

欣一は何時までもうつ伏しに泣きもだえてゐるのです。

2

そのかみ三とせの秋の日でした。

村の若者達の晴れて自慢の煙火を競ふ日が後一週間の間近い日のことでした。

欣一は自慢の大だまの製作に餘念がありません。

——東——西——東——西ィ——

聲自慢の村の係がへいそくを振り振り、大筒の前に口上を叫んでゐる姿

……………

ド————ン！　シュシュシュ————

風を切つて清澄の秋の夜空に昇上して、見事冲空に爆發した七色の亂れ柳

熱叫する人どよみ……………

躍る若者欣一の胸はやがて來る晴れの日の幻に熱して行くのです。

——誰もほめなくつてもいゝ！　みゑちやんがほめれば澤山なんだ！

戀する女の笑顔で頭の中は一ぱいです。

欣一は樂しかつた。何から何まで嬉しかつたのです。外は寂寥と清澄の秋であつても欣一の胸の中は百花燎爛の春です。

おどる春です。

あゝでも、なんと呪はしい禍のふりかゝつたこと。藥品の混合に餘念のない欣一の眼にうつらなかつた小さい小さい石……………

しづかに、しづかにかき廻してゐるすり棒にフトふれてすられた瞬間ですり鉢は物凄い煙を吐いて躍り出しました。

なんと呪はしい顔貌と變つた欣一ではなかつたか！

治療の甲斐もなくめしひとなり、呪はしい醜い容貌となつた欣一の上に悲しい日は訪れては過ぎ、訪れては過ぎて行くのでした。

親しかつたみゑ子もやさしい言葉はかけては呉れても、一緒に話しては呉れません。

默つて行き過ぎられるより、却つて悲しいめしひの哀戀はつのります。

3

欣一は思つてゐるみゑ子の嫁ぐ噂を耳にした時に、何もかもまつ黑にこきませられたやうな感じに思はず頭をかゝへるのでした。

もしやとは思つてゐても、さて明らさまに戀の破れを知つた悲しさは……………

……………かきむしられる苦しみであり、もだえでもありました。

唯一の生きる絆を失つためしひの欣一の心に浮ぶものは當然に死であつたのです。

——點字をつゞつたとて……………

誰が知らう！　誰が讀んで呉れやう！

あきらめやうとしても、知つてもらひたい弱さに、知つてもらへるはかない夢を描いて殘す遺書でした。

——みゑちやん……………

虚空に青き灯をともす
虚空に青き灯をはなす

病室

安濟和三

威壓する樣な夕やけは
燕の巣迄でのびて
輝きをなげだ

白かつた寢台も
眞赤なほのをさい立てゝ居る

靜かに横わる肉魂の
淡白い圓い輪廓は
赤くなければなほはつきり白い

夕暮

中澤秀峰

時の流動を凝視して居たら
日輪はつかの間に參差の峰に朶もれた

薄明一とき
音もなくさ庭べく皐月が散る

暮色は生々しい匂をたゝへて
一分の隙もなく這へよつてくる
殘光は明朗の思索にかたむけてゐた。

蜻蛉

あまたたび降りそゝぐ霖雨晴れ間に
蛙コロ〳〵と冴音をふるわしてる
あやめが匂ふ小池の畔際に

はつねんと　蜻蛉が生まれた

まんまるい光ち滿ちと蒼い瞳
考へた日輪の後姿を見つめてた

うしろ

片寄耿二

もえつきし　ろうそくのひは　じ〳〵じろと香
のごと　うすやみにたち迷ひ

かつて見たみる子の笑顔の幻を追ふて、あはれめしひの戀の悲しい投身であるのです。

4

翌朝村人の手に抱かれた欣一の死顔……………
醜い容貌の中に漂ふ和んだ一沫の寂しい笑みがありました。

散文

憩ひを藝術に

秋山愁子

夏の訪れと共に四邊は新鮮な繪具で濡れたパレットの樣にさま〴〵に彩られた。若葉のかげでは淡紅色のパラソルや紺の繪日傘が美しい圓舞曲を奏でゝゐる。

夏を迎へる毎に彼の腦裡に蘇る惱ましい記憶の數々、拂拭し難い罪の記憶永久に彼はさうした醜い過古と陰慘な氣持に、噴まれ續けねばならないのだらうか?

罪惡の呵責から彼は逃れるため、どんなに不善からの逃避を得て、正への蘇生へと精進したらう。然しあまりにも冷かな周圍は正の蘇生へ承認も憩ひも與へてはくれなかつた。

たゞ彼のいたましいまでに心づけられた態度に、さげすみの眼を投げかけるばかりだつた。

彼は周圍の空氣に浸る毎に苛立つ感情を、どうしようもなかつた。

××に對する憧憬さへなかつたら、いかに彼の心が餧に飢えてゐたとはいひあれほど輕はずみな蹉跌はしなかつたらうに。

悒鬱な彼の心は火を見つけた樣にそれに暖まらうとはしなかつたらうに。

彼は今は離りゆく××に對して敵意さへ抱く樣になつた。

懊惱と苦痛の凝固した世の中に對して反撥心を釀し出した。

こうして獨りの落魄の子、敗殘の子は遠い人生てう物淒い荒海をしるべもなく渡らねばならなかつた。

闇の夜にかぢを失つた小舟の樣に激しい混亂にあれまどひつ彼!!!いたる所が恐しい幻滅の鋭い牙を磨いて待つて居た——彼をあまりにも致命的な打擊に疲れ萎ねた彼は憩ひを藝術に求めた。

その日から彼の血みどろの行進は——

藝術に精進する人々との共力同行の步調に、逝きては二度とかへらぬ若い命を永久に意義あらしめるために——愁を捨てゝ藝術の香に心行くまで醉はうとした。

創作

うで玉子

小沼文彦

春二はもき餘程長い事、一度ゆで玉子を喰べて見たひと思つてゐた。

——手輕な亞鉛の竈の上に大きな木鉢を据え、眞中に小瓮を埋けてそれに玉子が一杯に這入つて居る。下の竈からは湯氣が絶ゑずブウブウと吹き上つて、玉子の上にふりかけてある鹽はジワ〳〵と融けかたまつて行く。

玉子賣のお爺さんは、村外れの塵芥捨場の上に住んで居る紙屑買ひで、緣日には、きまつて汚ない御釜帽にもぐり外套といふ粉裝でゆで玉子を賣りに出るのだつた。

『佐七つあん。相變らずだなあどうだい、景氣は?』微醉機嫌で通りかかつた村の大工が聲をかける。

『えへ、、。』お爺さんは曖昧に笑つて見せて、あわてたやうに、大きな澁團扇を急にバタ〳〵させる。湯氣がサーッと立上る——。

『うでたまご』春二は口に出してゆつくり云つて見て、ふと耳をすましたが鎭守の森の方からは、もう賑やかな馬鹿囃子の音が聞えて來た。時々その音をさへぎるやうに風が吹いて通る。何處かで紙鳶がうなつて居た。

春二は南の椽先に腰掛けたまゝ、狹い庭の竹垣の下に群れて餌を漁つて居る鷄の樣子をじつと見て居た。米をすぐつて少しずゝ投げてやると、彼等は爭つて飛びつきながら、けたゝましい叫びを擧げた。コーチンとブラマの雜

われはみぬ　わがこゝろ
音響は　かせにのり　ながれゆき
その飛沫　一つゞゝ　きゆるとき
われはきく　わがこゝろ

この　いたて　おもむろに　跡さりて
おもひでに　みつむとき
いやさらに　かなしみは　こゝろにうづき
われはみる　香のごとたち迷ふ戀ごころ　わ
れはきく　消えんとし尙ひゞく　戀のうた

手

わが手は　やはらかかりき
をみなの手のごとく
しろく　ほそく

わがちひさき戀びとは
長い方にありて　わが手をまさぐりつつ
哥磨のをんなのごとく
ほそき眼をして　わらひぬ
いくじなしと
われをわらひぬ

詩南車詠草

宮田明愛

◇

夕もまたいたらす涼しなよ竹の葉すれゆかしく通ふ玉琴

打ちわたすを指に奇しき靈もやと思はるゝまで紳すさふ曲

×　　×

その昔旅人の足もとめつらむ矢吹が原の松生へる沼（矢吹が原にて）

島末眞之

◇

いつしかに靑葉となりしこのあたり蝙山底山薄霞せり

とりどりの草花の名札書き終へて靑葉の雨あし見てゐたりけり

ゆくりなく夕陽に濡れし石ころを拾ひて川に投げて見しかな

闇を縫ふ螢の群の親しさや夜仕事終へて庭に

種が一羽、不恰好な身体をよろ〳〵させながら、先刻から咽喉をふくらせてしきりにクゥ〳〵云つて居る。

春二の家の鷄は日に七ツ八ツつゝの卵を生むのである。が、それが貧しい春二の口に入る事は月に三度とはないのだつた。日曜毎に、町の鳥屋がやつて來て、まとめて持つて行つた。

鎭守の森の囃子は益々賑やかになつて來たが春二は村役塲の書記をしてゐる父が五時に退けて來るまでは家をはなれなかつた。去年の夏、村を襲つた窒扶斯で母が死んでからは、學校がひけてからも、ずつとそして家に居るのだつた。

『春ちやん、まだ行けねね？』

垣根の向ふで隣りの息子の聲がよんだ。春二は椽をはなれて立ち上つた

『うんまだ歸つて來ねんだもの。お前、もう、行くの？』

『あゝ。ぢや、あとから來いよ、なあ』

うん、ぢき行かあ。』

げた〳〵と云ふ足音が遠くに聞えて行つた。

『う、で、た、ま、ご。』春二は一字々々、叮嚀に發音して見た。

『今夜、一つ買つて貰ふべ、きつと。』

春二は、いつもの通り風呂敷包を火鉢の傍の茶卓子の上に置いた儘、よれ〳〵になつた縞のオーバを脫いで居る父の姿を悲しく眺めた。

父はむつつりと默りこんで、ヂロ〳〵室中を眺めまわして居た。薄暗い電燈は隅々に朦朧とした冷たい影を作つて居る。

幾度かためつた末、春二はやつと口を切らうとした。と、不意に父が向き直つた。

『昨日の目刺しがまだあるだらう、あみと一緒に持つて來な』

春二はおづ〳〵と父の顔を見上げた。燈火にそむいた瘦せこけた頰のあたりには、深々と黑い影が刻まれて居た。

『お父つちやあん。晩にお錢くんない？　夜宮に行くんだけれど――。』

そして、そつと息をひいて盜み眼に父の顔色をうかゞつた。

『夜宮に行くのに金が要るんか？』

『だつて、うで玉子を買ひたひんだもの』

玉子なら家にもあらあ。』

でも――。』

父はまた默りこんで室の隅を見つめた。春二はそつと居ずまひを直しておど〳〵しながら父の眼を見上げた。

『そんなら俺が連れてつてやる。今夜は、が、お前も小さい子共でもあるまひし、何だ、玉子なんど欲しがるとは。仕樣のない――

一時間ののち、春二は父について鎭守の森の雜踏の中を小さく步いて居た光りと影の怪しい錯綜の中を往來する、着かざつた村の娘たちの姿は、平常とは違つた、何か幻の國のもの丶樣に思はれた。太皷や喇叭の音が間斷なしに聞えた。――ふと、玉子賣りの爺さんの事を思ひ出して春二はそつと父を仰いだ、

お爺さんはいつもの大欅の下に小さな屋台を擴げて居た。春二は立止つて父の袖を引張つた。

『ねえ、お父ちあん、かつとくれよ。』

父はじつと春二の顔をながめた。それからちらと店のゆで玉子に眼をやつた。

『ねえ、よう、お父ちやん。』

『また馬鹿あはじめた。』

『よう、たつた一つでいゝんだから。』

お爺さんはニヤ〳〵笑ひながら、竈の横手に出て來た。

『此方の方は一つ五錢で。へ、、。』

父は仕方ないと云つた風に蟇口を取つて口を開けた、春二はお爺さんに貰つたゆで玉子を手にして、また父の顔色をうかがつた。

『家に歸つてから喰べるんだぞ、春二。』

◇

春二ははつと息をひいて、あわてゝもう冷たくなつた、玉の中をのぞきこんだ。くされ玉子だ！

出づれば
夏の海は眞澄たるかゝ樂しげに飛ぶ鴎にも形の添ひつゝ

◇　佐藤義家

あけやらぬ梅雨のしぐれにとぎれ來るこたちとほしの初蟬のこゑ
ときめきて延びるさゝげのふたつてに泌むさやかなる梅雨あけの風
咫石さいわかちがたしの暗闇に相會ふ灯には親しごゝろな
合歡としな文に見つるもその木姿知るさいなぐもすごしきたれり（遂に近き日に知りしより）
合歡の葉に花見いそむる近き日もあるものと思へつゝ千草たばねむ

三人抄

鈴木佐代子

◆

冷え〳〵と霧雨かゝる窓に居てわれの想ひのあやまちに泣く
ふと起てばわが衰へし影ありぬその知らぬ樑の窓の玻璃戸に

◆　さこう・きよこ

おだやかに港は暮れり泊り船にいましも赤き灯のつきにける
短夜を銀の匙もて苺食めば爪にもにほう灯のいろ
青空の雫とぞ甓ゆ青胡瓜をさくさく切ればいとさやかなる

◆　小杉露子

黄昏のそゞろ歩きの吾が胸にふと洩れ來たる草笛の音
南の窓邊にうつる月影のうすくつめたしいたつきの部屋
かげ二つ窓にうつりてもの云はず名知らぬ草の雨にぬるゝ夜

彼は盗み眼に、電燈の下で役場から持つて來た書き物に心を奪はれて居る父を見やつた。父は何も知らずに、しきりに朱筆で何か書きこんで居た。春二はそつと父の顔と腐り果ててどろ〳〵して居る玉子とを見較べた――だから、云はない事ぢやないんだ、彼は父の言葉を豫想してみてはつと胸をつかれた。そして氣附かれないやうに玉子を口にあてて、そつとどろ〳〵の液汁を吸ひこんだ。チユツと音がした。父は筆を控へて、ジロリと彼の方を見よこした。
「おい、腐つてるんぢやないか、そいつは、ゆで玉子たあ、かたいもんだ一寸見せな、――フン、見ろ腐れ切つてら、だから最初から言つてるんだ。八つにもなつて居て、何だ」
そして再び机に向つて筆をとつた。春二は腐つたゆで玉子を持つたまゝぼんやりと父の横顔を眺めて居た。父は見かへらうともしなかつた。
張合ひがぬけたやうに春二は玉子の中に見入つた。どろ〳〵した汚物からは異様な臭ひが立つて居た。胸の邊が薄氣味わるくむかついた。
春二は父の横顔を眺めながら、そつと涙をぬぐつた。

小品

月夜

秋田千秋

蒼白い月が空にかゝつてゐた
二人は町をはなれて野へ行つた
私たちは何も語らなかつた
私はひどく女が小さいやうに思はれた
丸い、細い肩に手をおくのを、やめやうかとさえ思つた
牛小屋の前を右に折れて、あかしやの並木にかゝつた時女は歩きをまつて私の方を見た
葉越にながれてくる月の光が美しい彼女の鼻から黒子のある頰の半面にかけながれた
私はいつもみるやうに女の眼を見た。
これから接吻した
二人はまた靜かに歩き出した
並木をすぎて野へ出た
すると二人の心は急に、自由にひらけて行くやうな氣がした。
私たちはまだ無言でゐたが、眼がいろ〳〵なことを語つた。
自由であることや
幸福であることや
二人はいつまでもかうして行かう――。
と云ふことなど
月の光をさへぎるものはなかつた
二人は蒼白い光を全身にあびて小さい沙丘に腰をおろした。
遠くに、黒い、やはらかい公園の姿があつた、
それに眼をやりながら、二人は少しづつ話した。
女はしきりに赤坊のことを話した。
快活に微笑しながら
胸に手をやつたり
私の手をあつく握りしめたりしながら、
しきりに話した。
私は輕くそれに合槌した。
私は女の寂しい顔や姿をこの上なく愛してゐたが
さうした時の
子供のやうに無邪氣な女の心をだまつて見てゐるのが、
また好きであつた。
彼女は非常に幸福らしい。
しまひに私の胸に身をなげて
こんなことまで言ひ出した。
「赤坊をもてば、お前はんにいつ棄てられてもいいから。」
二人は永いこと沙丘にすはつてゐた。
幸福な夜であつた。

雜詠

田家明

◆

しのゝめの空も開けてさ庭邊の眞白き方に青
葉ほの見ゆ
心地せむ名殘の春のこのごろは山の遠つのほ
の霞たる
潮くむ乙女の袖もにほふまで輝きそむる朝ぼ
らけかな
水の面の空にも淸き月出でゝとまる小舟のす
み染の影

白椿

◆

病床に伏してしみ〴〵我れは知る病を戀ひし
そのかみの日を
月に二度三度も病に伏す樣になりし我れをば
悲しと思ふ
親(ちか)き友にしばしはペンも取らざりと今日も思
ひぬ枕に伏して

ねこうさぶらう

◆

我が燒きし紙を見つめつ淋しくもはかなく消
ゆる人の生を思ふし

中島修二郎

◆

鷄に餌をやりてきたれば我が部屋に明るく朝
の日はみちてゐるも

詩評

K　K　K

◎街　著

北村榮太郎「蜻蛉と童兒」簡にして暗示する所が多い。

大橋眞弓「月光室」氣持のいゝ詩境だ、こう云ふ詩を味ひ居た事を嬉しく思ふ。

北村千秋「暮寂」あまり技巧を加へぬ所にいゝ所があるかも知れぬ。誰にも判る詩だ。

田中篁之介「初夏雜景」健かに整つた詩だ、素直でたくまぬ技巧が光つてゐる。

◎詩　戰

加々見彰「抗爭」相憎く此の詩を批評するだけの頭を僕は持つてゐない。御氣毒様

七號（コント）

中木良一

都會の午後——。

Kカフエーの二階、テーブルをかこんで、若い、まだ二十歳位の學生が二人、盛に洋食を喰べて居た。

側に、十七ばかりの、實に柔らかい感じの少女が、白い、ほんとに淸潔なエプロンをかけたりりしい姿で、立つて居る……

「綾ちやんて云ふんだね、そして幾つ？十六？それとも、十七？」

學生は、たゞもう嬉しいと云ふ微笑を顏中に溢れさせながら、他愛もない事を話し掛ける。

「十七です」

少女も嬉しさうに答へた。ほんとに嬉しさうに答へた。微笑しながら、臆するといふ程でもないつゝましさで受け答へして居た。

「君は好いなア。この土地に、これからズツと居られるのだから……」

學生Bの方は、Aを顧みて羨しさうに嘆息した。

「あら、あなたは、東京に居るのと、違ひますの？」

「今晩は京都に向けて立たなくちやならないのです」

Bはちよつと悲しさうに云ふ。そしてAの方を顎で指しながら、

「この人は好いよ、この九月から、一高に入學したのだから。」

「あなたは、學校どこなの？」

「京都の商校——今朝二人で故郷を出たのだよ、一人は京都へ、一人は東京へ——ね、それで、もう當分逢へまいと云ふので、僕もこゝへ途中下車しちつたので……」

Bはほんとに A が羨ましくなつた。

八月の終りの、その午後のあつい日盛り、ここの二階はほの暗く、十七の少女のエプロンが砂糖のやうに白い。

やさしい少女。

今日逢つて、そして今日別れねばならない。

Aが便所に立つた留守に、

「綾ちやん」と呼んで見た。

彼女は羞しように微笑して、無言のまゝ胸の「7」と彫つた徽章をいぢつて居る。

「七號の綾ちやん。」

Bは立上つた。この女の唇の柔らかさ、罌粟(けし)の花びらよりも、弱々しく

2

AとBとは、いつたん宿に歸つたが、夕方になると、Bはどうしても、もう一度K——に行くと云ひ出してきかなかつた。BはAを無理に誘ひ出したそのために、京都へ立つ列車を一つも一つも乘り遲らせることを覺悟したのである。

AとBは又、晝まのやうな洋食の皿を重ねた。か殘念なことに、こんどは7號のウエントレスの番でなかつた。

Bはいら〳〵して、屋上から三階へ降りるところの階段口に立つた、その階段口には船のデツキの降り口のやうな、圍ひ屋根が出來て居る、その蔭に立つて待ちながらBは階段の底に當る壁の姿見を、一生懸命に上から見下して居た。

やがて、白い姿が、その姿見に映りながら遠くからゆら〳〵と百合の花かゆれるやうに、近づいて來た、白い姿は、姿見の前まで來るとちよつと立止り、髮をかいなで、襟をなほす。

「綾ちやんだなあ」

そう思ふと彼はキユツとなつた。そしてトン〳〵と階段をおりた、二人は階段の途中で出會つた。そしてそのまゝいきなり抱き合つた。

「きつと、きつと、お手紙さね——妾、京都に行きますわ」小女の一生懸命の囁きだつた。そしてその儘二人の暖い体温は傳り合つた。

そしてその儘二人は何時迄も離れなかつた。

詩

秋山愁子選

わが知らぬ歌

岡田みのる（東京）

陽にゆらぐダリヤを摘みて
眞晝
丘に上りぬ

コスモスはやさしくなびき
古き校舍の窓よりもるゝ
あどけなき歌聲
遠き碧き空を仰ぎて
わが幼き日の歌を思ひ返へせど
あゝ知らぬ歌なり

あゝわが知らぬ歌のみなれば
紅のダリヤを捨て
淋しくも丘を下りぬ

評

（純な情緒をひびかせております、優しい曲です。かういふ詩に強い力を求めるのは違つてゐます。すなほな心が愛されます。一番眞かつたと思ひます）

おもひで

坂本直技（神戸）

沼の面に
夕明る萱の葉
縁なり、なやまし
あゆみくれば
林にこもる霧のいろ
青透きとして胸に香る
あゝ山峽の夏淺きに
鶯の歌をなき日
わがこゝろ
いかなればいたみをめし

評

（古調でいい小曲です。圓熟した技巧を持つておられます）

初夏のうれひ

菊地誠一（山形）

1

われいく日
君戀ふる寂寥の實をかい抱きて
腐れ行くザボンを見りし
ゆううつは雨と降りつゝ

2

ひと…………
あしたにやさしき聲掛くるありて
われ
かなしき夕の歌を唄ふなり

3

なにゆゑにわれ
青磁の冷きをめづるぞ
なにゆゑに
黄表紙の詩集を水にひたすや
はかなきは初夏のうれひ

評

（（2）と（3）が眞う御座いました。殊に（3）の方がまた眞かつたと思ひます。）

合歓木の花

さこう・きよこ（平）

嫁ぐ一人のおとめ
しみじみと　しみじみと
突きながら
白粉のはけを
動かしてゐる

或るおさめのうたへる。

空が黑く思へる日から
思ひ出は
小人の馬車で
去つて行つて行きました
白いよこがほも
月色の砂山の夕べも
殘つたのは白い墓標だけです。

評

（あとの方がいいでした。このまま小さく固まらないでぐんぐん大きく復雜にのびて行つていたゞきたいと思ひます）

短章二粒

坪井憧（讃島）

1

初夏の憂欝が白楊の木肌に
ぴつたり寄り添つてゐる
眞晝の街路を
僕は帽子もかぶらずに
歩むのが好きだ

2

思ふことがいつぱいになると
僕はばらのはなびらを
一ひらずゝむしりながら
そつと昔の唄を
思ひ出して見る

初夏の夜

大里彌生（平）

青いインクびんをすかして見た
まちのすがたは
まるくあたりをとりかこんで
濃い藍色の底に沈んで居る。
月の光にぬれた黑へいの外には
涙にうるんだ
二ツの瞳が泛いて居た。
　初夏のよるは
乙女の白いうなぢにも似て
なやましくも又
うるはしく更けて行く！

丘上の人

大川傳（四倉）

わたしは砂の上に座し
潮ばすだ風に吹かれながら
唯一人みつめてる。

向ふの丘の草の上に
若い戀人が二人
肩を竝べて話してる。
霧が薄く中間に浮んで居て
戀人二人をはつきり
寫し出てことは出來なかつた
ただ赤い帶のみが
目立つて居た
彼等のかたらひは美しい戀であつた
二人はまだ話し續けて居る

霧が晴れて來た
鹽谷の岬が光つてる
六月下旬の午後。

わたしは砂の上に座し
潮ばんだ風に吹かれながら
唯一人みつめてた。

なやましき春

水町冷子（平）

春なれど岡にのぼりぬ
過ぎし日の夢を戀ひて
あゝされど悲しきまぼろし
果てもなき淋しさ
涙流れて止まざりき
若草の上をぬらしぬ
十人のなやましき春に

七月!!

加藤ひろし（内郷）

1

七月の林を風とくぐつて
居るのは私しです
つい風が死んだので
私は呼吸を止められました

2

蒼い七月の空を映して
小川はまんまると
ふくれました
蒼い七月をゆるゆる
運んで行くは
まんまるとふくれた
あの小川なのです！

◎晴耕

田高與一『猿』これを詩として我等の前に提供すべき詩だろうか。君間違ひちやいけない先祖は同じたか知れぬが、現在では猿と人間は違ふ。

大村信夫『夕暮』實感に飾りつけない所がいゝ。だが少しきざだ。

◎落葉松

深川秀邦『想出を追ふ』惡くない詩だ、平易な姿の中に人間の永遠の哀傷否、思出を出してゐる。老熟した手法だ。僕も味ひたひ。

井上春彦『山を登る霞』他一篇、詩人らしい詩を書く詩人だ。作者は確しかに圓熟した技巧を持つてゐられる。才人らしい、二篇ともなだらかな歌ひ振りに心惹かれた。

◎日本詩院

山田水哉『靜物』一人よがりの詩だ。恐らくは君自身も解らないだらう、然し君に云はせると解らぬ所がいゝのかも知れぬ。どつちにしても厄介な詩だ。

◎魔貌

勝本高夫『華やかな憂鬱』

欣森一男『今の私の幸福から』

以上二篇、取立て云ふべき新味のある作品ではないが、誰しもが、求めてゐる詩だ。前者は引しめて書けば延びる人だ。

◎草笛

鈴木淳『馬』腐れかけた詩だ、犬でも喰はぬ、馬も倘更の事だ、馬子は泣くだらう。

磐城文藝協會々則

第一條　本會を磐城文藝協會と稱す

第二條　本會事務所を　　　に置く

第三條　本會は地方文藝の向上發達に努力し鄕土藝術の開拓に資するを以つて目的とす

第四條　本會はその目的を達成する爲め左の事業を爲す

一、文藝、美術、音樂、演劇、映畫等に關し講演會、研究會、展覽會等諸般の催し

一、出版

第五條　本會員を特別會員及び普通會員の二つに分ち年額五圓以上の維持費を納入する者又は本會に特別の功勞ありたる者を理事會の決定に依り特別會員と爲し本會の趣旨に贊成する者を普通會員とす、會費は別に定む

第六條　本會に左の役員を置く

會長一名、副會長一名、主事一名、理事十名

第七條　本會役員は特別會員の選擧に依つて決し會長、副會長、主事、理事長は役員會の互選に依る、但し其の任期を二ケ年とす

會長は會務を總理し副會長是れを補佐す、主事は會務を鞅掌し理事長は理事を代表し主事の命に依つて會務を執行し理事は會務を分轄擔當す

第八條　平町以外に特別會員五名以上ある塲合は支部を設くる事を得

第九條　本會は年一回總會を開く

第十條　本會規則を加除訂正する塲合は理事會の決議に據る

以上

磐城文藝協會役員

會長　高久忠、副會長　諸橋元三郎、主事　川崎文治、理事長片寄耿二、理事（イロハ順）馬塲卯一郎、新妻育太郎、松本純一、福田正夫、佐藤義家、佐藤清子、宮田誠吉、南武、島田春夫、鈴木實

編輯後記

僕は此頃いろ〳〵なことを考へて寂しい、僕は自負しながら、この寂しさにともすれば壓倒されるやうだ。

▼

いろ〳〵な雜誌や新聞で僕等に就いての是非を論じてゐるのを見る然もそれ等は大かた一種の決定論だ。一つは詩南車への羨望である。そう云ふの見ると一層さびしい。

▼

ある所で誰かが詩南車をあげつらつてゐるが、これなどは羨望であり。餘りに非常識だ

▼

血迷つた揚句だとすれば、何といふ味氣ないことだ、もう少し度量を示せないものだらうか。

▼

僕は、僕達の作品の批評されることに苦情はあるべくない、しかし私の感情を交へた批評は斥けたい、私的感情で云ひ合ふのは實に嫌だ

▼

もとより『詩南車』は習作だ。未知數だ、未完成だ、こゝらが甚いではあるまひか。僕等は完成したとは思はないけれど、完成しやうと心掛てゐるのだ。

▼

そこまで解つて下される人は居ないのか。一人でも二人でもいゝ、詩南車そのものを眞く理解し眞實なる批判を下して吳れる人が居れば非常に嬉しいのだ。が當地の文藝家にそれを求めるは無理か知れぬが、それを無理さして濟まされる可きものだらうか？

▼

兎角、私的感情で事をなすは實際嫌だ。要するに當地の文藝家は謙譲と節操が一番缺けてゐる。こう云ふ事はお互に精一ぱいに謹んでほしいものだ。

にくまれ口はこゝで止めたい。雜記にうつりたい。

▼前號の詩欄は確しかに失敗だつた。實際はづかしい程まづかつた、批難も受けたので本號は失敗を取返すべく努力した。自信あるものを作り上げた積りである。

▼寺崎、下田の兩氏の寄稿特に深謝、藤井、舘、深川、馬塲、松本、勝本の諸氏からの寄稿も大變嬉しかつたそれから多數投書の中から、前田、清水の兩君の詩を本欄に出しておいた。この二人は詩態も眞く、素直で眞面目らしいので出しておいた。今後投書の中にいゝ詩があつたら一人か二人位宛掲載して行きたい。

▼豫告しなかつたが八日の夜『文藝講演と音樂の夕』を開いたこれは當地の文藝家ばかり集まつてやつたのであるが宣傳がきゝたせいか非常なる盛會であつた聽衆四百名中に紅一點秋山恭子氏の講演會堂を賑し中村川崎兩氏の御講演も素晴しく深川島末兩氏の祝電を感謝す

▼島田君が事情のため同人を脫け、新らしく小泉、秋山の兩君を同人に迎ひて置く。

▼本號掲載の小沼氏の短篇、うで玉子。は立派な作品だ此の人の作品を二三回讀んだがその內これが一番よかつた筆の運びと云ひ、描寫と云ひ、貧しい春二のねごねごした心の表現など確しかにうまい、僕はこの人のために今後を祝福してやまない。

▼本號の表紙は[redacted]の素描である。

▼次號より本誌を隔月發行にする。

（片寄耿二）

◆投稿規定◆

詩、短歌、俳句、創作、散文、小品、謠曲、以上全べて原稿紙使用い事、原稿の最初に種別住所姓名明記の事、編輯は一任の事、宛名、福島縣平町五丁目、詩南社『詩南車』編輯部宛

締切九月十五日　次號十月五日發行

◆同人◆

岡田四郎　東京市京橋區銀座四丁目文運堂方

鈴木勇　福島縣平町四丁目八番地

佐藤義家　仝　平町七軒町三十二番地

小泉實　仝　平町三丁目星製藥內

岡田廣光　仝　四ツ倉町仲町六六番地

石井賢三　仝　平町大工町十九番地

秋山恭子

片寄耿二　仝　平町五丁目二十八番地

◆新刊紹介◆

『人生の旅路我れは行く』（小泉實著）

これは氏の處女版である。詩と創作（一篇）とに飾られ作品は下手な技巧に隨せず何んのこだはりもなく實感そのまゝをすら〳〵と歌を盡されてゐる。及び氏の性格なども眞く表現されてゐる。（四六版、一〇七頁、定價七拾錢、取扱所詩南社）

◆寄贈深謝◆

落葉松、詩美學、桔梟、街景、無軌道、白揚、表現詩人無名藝術、青杉、廻轉木馬、ゆりかご、創作搭畔、映像魔貌、表現人、北方詩人、潮、日本詩院、TEN・KEI詩行脚、詩戰、なぎさ、しづく、伊信事報、藝術宗塲、晴耕、創作時代、旅路、名古屋詩人、新生、若日文壇、海、草笛、瞳、藝術新報

◆本誌取扱店◆

柴田書店、清光堂分店、マルカ書房、平デパート書籍部

飯田書店、清水屋書店、（四ツ倉）

昭和三年八月十日　印刷納本
昭和三年八月十五日　發　行
【定價金拾五錢】　送料二錢

編輯人　福島縣平町五丁目二十八番地　片寄耿二
發行人　福島縣平町七軒町三十二番地　佐藤義家
印刷人　福島縣平町長橋町三十五番地　鈴木實
印刷所　福島縣平町長橋町三十五番地　常磐毎日印刷所
發行所　福島縣平町五丁目二十八番地　詩南社

バナ、は智恵の實

―バナ、と言ふ語は智恵―
―の實と詳されて居ります―

……さはやかな南國的のかほり
……その豊滿な甘美の味ひ
……さては萬人の嗜好するところ

TAIWAN FRVITS
STRAIGHT
IMPO oTER

平町四丁目
萬屋商店
電話二七三番

御寫眞の御用は
―オカヤマへ

平館隣
岡山寫眞館
電話六一五番

石版印刷の御用は
―電話七五七番へ

丸山印刷所
平驛前

〔定價拾五錢〕